俊寛嶋物語

壹

へ13
3140
1

駿河屋

自叙

一年三百六十日問訊應荅千萬言無壯人而不言間話俗談江湖事賓主公然三唇吻皆是不無用之辯耶讀書者亦類之亦經史傳之有益于世或讀焉或不讀焉臻小說野乘則人人啓函壯誦之兼博知倦蓋以小家珍說其事奇異其文易解也王仲任嘗有言曰詼諧謔談甘如

へ 13
3140
昭和九年九月十二日購求
へ 13
3140
19

蜜有以救良藥必苦口導之以飴蜜人
最逆耳諷之以滑稽醫生原来不好糖蜜
說客爲誇寓言之有愛畫龍憎真龍勢一不
得已也是故釋氏誑度衆生其徒稱之方
便孫子詭陷城廓兵家称之或略設夫有
塞引邪之路開先迷之門則雖寓言詭辯
不爲亦無益于世鳥之不世鳳凰獸之不
種麒麟人之不祖聖賢事之不常定理物

皆然不足怪予少時好讀小說察於目味
於心曠若發矇曰竊喜之遂摘藻含毫更
裝新研者有年于此矣其書倣釋氏方便
推囘談果間亦雜引孫子武略自稱之勸
懲雖爲世無益於俗見琢然非彼饒舌無
用之辯說長咎短相罵而快之類靜夜坐
蕉窻下新茶一碗美酒一壺幾層藏書攤
于坐右半睡童子果于榻左於是乎引燈

淨書案焚香澄精神而後歴遊乾坤
境暗勾引未生君子弦索別世界
傭役烏有先生録了人間一炊榮枯得
作者苦樂亦在其中矣嗚呼談美容易
喻深以淺喻難以易故文有淺深之秉
有易難之差吾才難能之賈豎焉擇
方所笑小者驩之賢者所辱癡人之
吾不愁有名無實唯懼有口無行素
摒不可談悉惕戲藁本亶亶等身悲哉販
著述給旦暮費楮毫活家命是吾所以味
紙俗也何日釋塵以鮮心累
文化戊辰年仲夏書于自編稗史俊寛島
物語卷端

曲亭主人

曲亭蔵書

相傳僧都左遷硫黄島以文治三年丙午四月廿三日竟殂于配所其臣有王丸葬之植松其上即盍距今五百七十三載云事在國史可徵也今茲欲天龍法印立石于松之傍需余記之且俾後世不誤古蹟　銘曰

芙蓉介紫石撰

右法勝寺の執行俊寛僧都の墓碑一張。近曾或人所藏の石を借拓し。享保年間。天海法印とゝのゝ。硫黄嶋よりを立石の高六尺ばかりなりとぞ。その文雅なるゝどとゝへども。遺趾をゝるゝ足れ。傳ゝ云。硫黄嶋八肥の長崎より。舟行八九里をゝいら俊寛の古墳彼処よゝあり。當時有王丸ちゝに葬ゝて主を葬るの日。墓標とゝ松今ゝ尽存ゝ。その輪數十圍枝條屈曲し。髣髴茂ゝとゝふ。

鬼一法眼

鏡中老相類吾深吾面終難鏡
裏尋明月
卟空〻受
月是他空
月本無心

金人完顏晴詩

鬼一女兒舞鶴

木姐前鶴

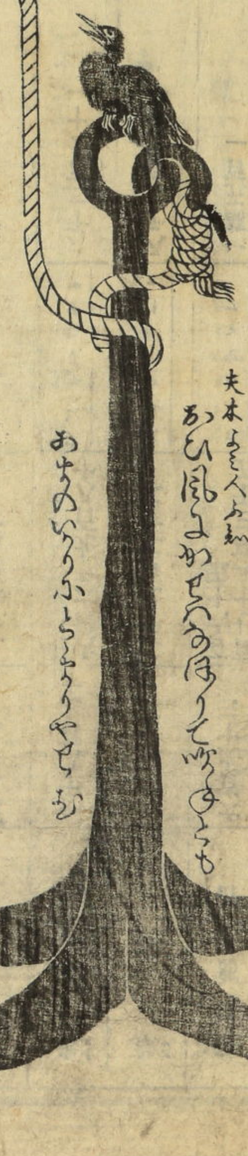
玉笛飄殘月下聲誰
家少婦倚樓聽晚
來更見龍唫處
洛北山前水面青

無名氏句

牛孺御曹司

俊寛僧都
この児
なでさすり手
飄零千里客日々問前途歸
到家山後才為好丈夫
丘濬詩
俊寛家僮蟻王
相撲
力士
相撲
力士
相撲
力士

麻呂
德壽
網裡魚
春酒紡酒
家門外口
流延我面
欲解簑衣
當又恐好
朝是西天
宋人詩
亀王
士
象
將
象
士
砲
白河の海
濃
辛苦遭逢起一往干戈落々四圍是山河
破碎冰潭絮身世浮沉浪打萍
惶恐灘頭說惶恐丁零洋裏
嘆丁零人生自古
誰無死留取丹心
照汗青
文丞祥詩
蟻王婦
安良子
士
象
將
象
士
砲



夫本末人ハ知あひ風ふかぬ所ハ
あやめいろふちゝやとむ

目録上

抱玉有罪
抱石投渊
抱薪救燃
抱景係風
抱首贈雙言
抱袖没海
抱留罠
抱家忘真
抱刃代兒

目録下

抱膝長歎
抱株索花
抱笞露宿
抱脚擒猪
抱琴述情
抱雪向日
抱書温故

目録終　全本八冊

俊寛僧都嶋物語引用書目姓氏古跡出證　凡十五部

○長門本平家物語　源平盛衰記　東鑑

玉海　千載集　寶物集

保暦間記　義経記　参考古事記

拾玉抄　訓閲集　山州名跡志

應仁記　義経虎之巻（明暦丁酉度會淳孫ノ序アリ）　謡曲画志

○俊寛ノ流謫　長門平家　黒江三郎（同上）　足摺明神（同上）　松前鶴（同上又盛衰記）

鬼一法眼（義経記）　白川遺（海同上）　鎌田三郎正親（同上）

大悲山の隠宅（盛衰記○長門本ニハ鞍馬ノ奥ニアリトアリ筆者ノ考ヘニ俊寛呼領十八箇荘長門平家）

法勝寺の塔（天皇の無熱池震旦の昆明池我朝の難波の蓮）

小うろとといふる（平記）　鬼界硫黄嶋圖（中山傳信録）　松蔭硯の圖（山州名跡）

この沈枚拳ヨ違めるを。要を摘てこれを録す。

書目出畢

俊寛僧都嶋物語巻之一

東都　曲亭馬琴編次

第一套　抱玉有罪ノ事　黒居亀王ノ事

祇園精舎の鐘の声。諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色。盛者必衰の理を顕す。奢る人も久しからず。春の夜の夢の如し。猛き人も終に滅びぬ。風の前の塵に同じ。尊き卑きも遂には滅びぬべし。誰か終の友あらざる。されど不義して富み且貴きものも浮める雲の危きを恃んで人を欺くが如く。快楽を淫酒の徹もてるに耽りて。驕奢の火坑に陥るを顧みず。智者ハ且猶しかるに。況や愚なる家の貨を美しく。燈に寄る虫の如く。猿馬を不及の慾に労して。立慾の海底に沈むことをかりそめにも。その迷ひの深きを。私漢の傳授する中に。清盛入道が一期の栄花。俊寛僧都の流謫の孤嶋

寛若僧ゝ後ゝ世ゝ以ゝ及び称抑太閤平清盛入道を。
さもるる才徳の人ゝあゝ祇ど。白河帝の落胤ゝ保元平治の擾乱ゝ元灰
の朝敵を討滅ゝ。朝恩祖先ゝ孫偉ゝ。官位人臣の上位極めゝ孫
厳上の仙籍を踏ゝ。一天の安危その身ゝ由ゝ。万機の理乱皆ゝあゝ。
善も悪も浮世のつをゝゝゝ任ゝ。ゝとゝ。ゝられをも因ゝ。ゝゝ
祖ゝ。或い佞媚。或い誹謗。ゝゝ不思議のゝも世ゝ。
ゝゝゝゝ時ゝ。ゝゝ。孫ゝ及びゝゝを育ゝ。ゝを。ゝゝゝゝ。
新亞相成親卿。ゝゝ。近衛の大将ゝ。ゝを。種ゝの祈禱。ゝゝ。
ゝ。結ゝ。ゝゝゝ。曩ゝ。清盛のゝ息。重盛。宗盛。ゝゝ。
大将ゝ。その後治承元年の春。清盛入道。ゝゝ。重盛卿ゝ
大将を辞ゝ。ゝ。ゝ。

村上院第七の皇子。二品中務親王其六代の後裔。仁和寺の法印寛雅
が子なり。京極の源亞相雅俊卿の孫なり。この雅俊卿は弓とる家よりく
ねどもいさよりと猛く人なり。常に肘を張り歯を切りつくろひ
ふるまひもすなほにして皆行とおのづからいぶせく忌ひて。京極の家の前をも人も振
通らざりけり。かかる人の孫なれども。俊寛もその志法師に似たり。平家政
を執る。皆と冠と処を異にすれども。世のいきどほりを傷痛くとひ倘朝廷
の内大臣なりぶ。愚僧もかい。奈良法師。山の大衆が物具麁小なる
べし。東方の楯ともの堀の埋仲ともるうて。國恩に報ひまゐらせんと。常に
ひらまるる友にうち暗ひるとなん。件の法勝寺は洛東大将軍の森の北。
白河の西にあり。白河院の御宇。兼暦元年十二月十八日。堂舎落成し。
主良真慶の導師にて。遷立供養の日。帝行幸ましまして。又[illegible]

二年十月朔日。法勝寺九層の塔成就せり。この塔は八角九重にして。横竪七十
八丈。四文奇麗壮観。美をつくし善を盡せり。重くは九會の曼荼羅を安置
せり。三國無双の鳳塔なり。ちぎの造り出だせり。天竺の老熟化。震旦の昆明池。
我朝の難波の浦。その影うつりそえり。ならびに無二の名物なり。白
河院の后。門院。内門院。常に常行堂を御建立ありて。仁和寺の入道の宮
をもうく。供料の導師とうのみ。亦法勝寺の御宇。康和五年七月十三日。當
寺に金書の大藏経を慶ぜらるる。ちりばめ沈勅願の梵城。貴賤渇
仰の霊場なり。當初仁和寺の性信勅撰に奏じ。この寺の寺務に居る。
今の執行俊寛僧都に至るまでこの法流肉食妻帯。就中俊寛が
ふるまひ。法門もとく繁昌して。十八箇所の庄園を伝へ。京極に宿所を構へ。
山荘を例へ。妻子富貴に処す。眷属衣食に飽く。その形儀槐門清

[illegible]

花の貴族と称せられ。是より先保元のころ俊寛僧都。妻を擇び。
いまだ意に稱ふものなりしに。成親卿の上童に。松の前と呼れて。舊園
なる處女なりしが。桃源春ふかしとの。花いまだ人間に折られぬ。溝渠秋深し。
たゞ紫嘗流水に伴ふべき情の色。外に見られぬ。その雅内に儔なりしを。俊
寛これに眼とどめて。常に行かゝひつゝ。なるべきもの風情なを。成親卿に
乞ふ精しく。意の中に深く。いまだ人の知らざるに。後に。つ。
その頃清盛。左宰大貳なりけるが。その孫。松の前に慈想しと。人をして
ひそかに艷書を贈ること。たびたびなれど。稲舟のいなとのみ回答。遂に永莫
のなげきとぞ。巻をあらるゝまで。遣しられば。清盛いたく。ひとを怨
しかを苦むるおもひ。不治の逆乱起て。信頼義朝討れぬ。その
ひと成親卿も。信頼の与人なりけれど。清盛さきだつて。罪科の

度に及ぶ。却成親卿ひとり。続く昇進し。依て正二位。宮の亞相に至りぬ。
清盛いたく成親卿に恩を被ぶる。明白に松の前を戀望する。彼
卿。ひとの外にこれを聽さず。平家飽まで朝恩に倍し。官位俸禄世
の耳目を驚ぶるに。なほ。これ。家の女房を賣て。媚をその人に
求むべし。松の前とい。豫て俊寛僧都に。これ。たりしを。これ。
意に入れを辞しけり。且清盛に妻あり。冨貴の家といへども。彼
歸とこれ。嫉妬。俊寛に深圖の輩なれども。妻なるこれ。正室たり。
加之。傍輩の倍姓村上源氏の嫡流にして。色を出し遠ざかる。常言に
寧雞の口となるとも。牛の後となるなかれと。いふ。呂連に。彼女房を俊寛
に妻ちんとて。松の前を養女と。婚姻の式。平のごとく準備して。京極
の宿所へ。遣しぬ。かしづき清盛。羅めぐり。物狂しくもふれ

成親卿のおのれがゆくすえをこれを恥ぢる者数年治承逆乱の時の越の中なる
事よりのち既に死刑に定められしより首を続くるのみならず者奴が父家成の
中納言なれど果てしなく官位の親よりも超大国のもてなし賜ひて時めく進ぶ蔭
ぞや。松の前ぐらの殿上人上達部なんどよ奪ひとられるともありなん。
俊寛の法師なり。是彼世をも人をも憚らずなる妻なりねたの後のうぐ、
らひたくする中なるべしのられ家親俊寛ホがうへよ越度あれうとて。
たぐいが祈り罵も止ど。竊にその隙を窺ひつ。いちぐ便宜をねがしうば。
空しく年月を過しなるよ今度成親卿の大ねを元をうんをまて実定
卿をのうちうちの成親卿よ物をありいたく。已前の恨を復んとて。実
ならんとまで。驚両の外よのこ降てたて。養を責められを恨めば。復お
家よ熱びあり。されば清盛の怒り俊寛の喜びとありて。僧都い成親卿の

情ある志を感激しこの卿のあるうば命も惜しいの惜るべ死とを傾さ
交参ほどよ。今度の隠謀一議よりほど第一番よ荷擔ちうの故く
僧都いのくのこく情を運び想をのうちうち。ぞうすて移ろうる妻女
よあれば妹夫の契孚常よ過く。松の前の腹よりもうちうり生産
しうちめい女児をて。鶴の前と名づけしうが十四才ゆ男児をて徳寿丸と
呼べうの。七才よりぬ。亦家嶽よ亀王蟻王とふ兄弟の童あり。
のうちもい越前国水江の庄の住人黒屋三郎が子ども。件の水江い法師
寺の所領しうよりて一年彼ぞべ行へ僧都えうら彼地ゆ行て不
圖黒屋がうちをうて童さ。れよりさとて。叶ぬ
黒屋三郎。桑と言受て。ぞてあうのうちをを進らぜ
これを都よりて。童をて名使ひつ。ものをこのうのよりう

俊寛僧都
奥家の前栽
蘇庭前の
花よ栗
ろ

俊寛僧都

の慈愛なるものゝ子より異なるべきなれば。亀王蟻王が恩を感じ。義をかゝ
いと信ずる奉公人。その志も苏〳〵ど傍らゞ忠信を二の壯佼まぞあ
りかゝと治承元年の春。亀王廿二歳蟻王廿歳よりなれの同胞。器
量骨柄逞しく。膂力人より勝れたるを力合もすると云ふ。天晴物の用に
ふべくゝえられど。法師の所従より勇力士い仰けるの。只の亀王い僧より
て法務寺の一の預ともなるさぞや。と主の俊寛僧都。亀王
をびるの日童より召使ひ才の蟻王より元服さ。松の前媒〳〵安良
子とゝかの童を妻〳〵。この安良子が親い門田の素山四郎と呼れて。
賤況のなれども彼が挙動信〳〵く。他より勝れたる操ある女子なれいとて
僧都夫婦縁の侍児の中より擇出す。蟻王が妻より賜りるとぞ。さる程に
今茲四月の上旬より成親卿俄頃より引籠るとあるよりて。俊寛もこの

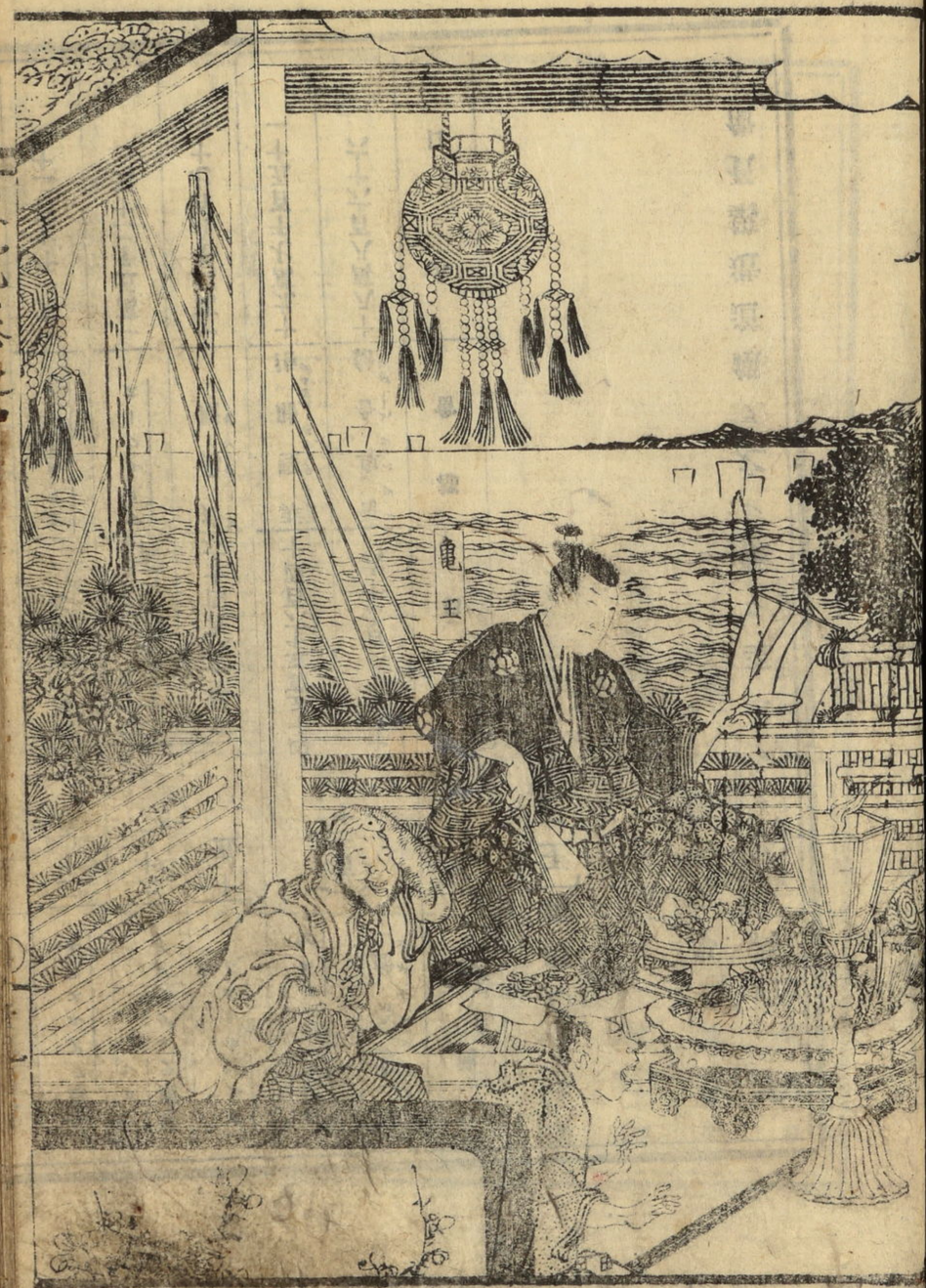
隱謀より。密かの業を。鹿谷なる山荘に集合てうち相結り。ものゝ
頃僧都が家の逆樹に巣を造りゆけり。是未曾有の珍事なれぞ。
人怪〳〵とゝはざるものなし。夫巣幕に巣るとは。危ふき警なる。季札が金言
況と樹の枝に寄るとは。是喪亡の象なるべし。と時の博士い唱けども。俊寛
いとれを耳もかけどいより〳〵平氏を滅ぼべし。謀もぐるとて。肝膽を摧いて
ぐとゝはなられ。幼稚より剛門に入りて武士の道に疎いれども。合戦のなら
ひ。兵粮と軍用金と。次第〳〵とぞ。とゝはなられ。その准備をとゝのへべ
りぐと。日業。有一日亀王を呼くゝ。いかなる。念死あれば。洛中なる貧人を食
よ。能ゆとぐるとゝ。十八ケ所の庄園を催促し。万倭の貢米と。三
千両の要金を課とゝ。速に積上せよ。倘逆ふ乃ば。越度とるべし。とゝ
めて度足せとて。頻とられを急とゝぐ。亀王いその意を図ぐいと不審な

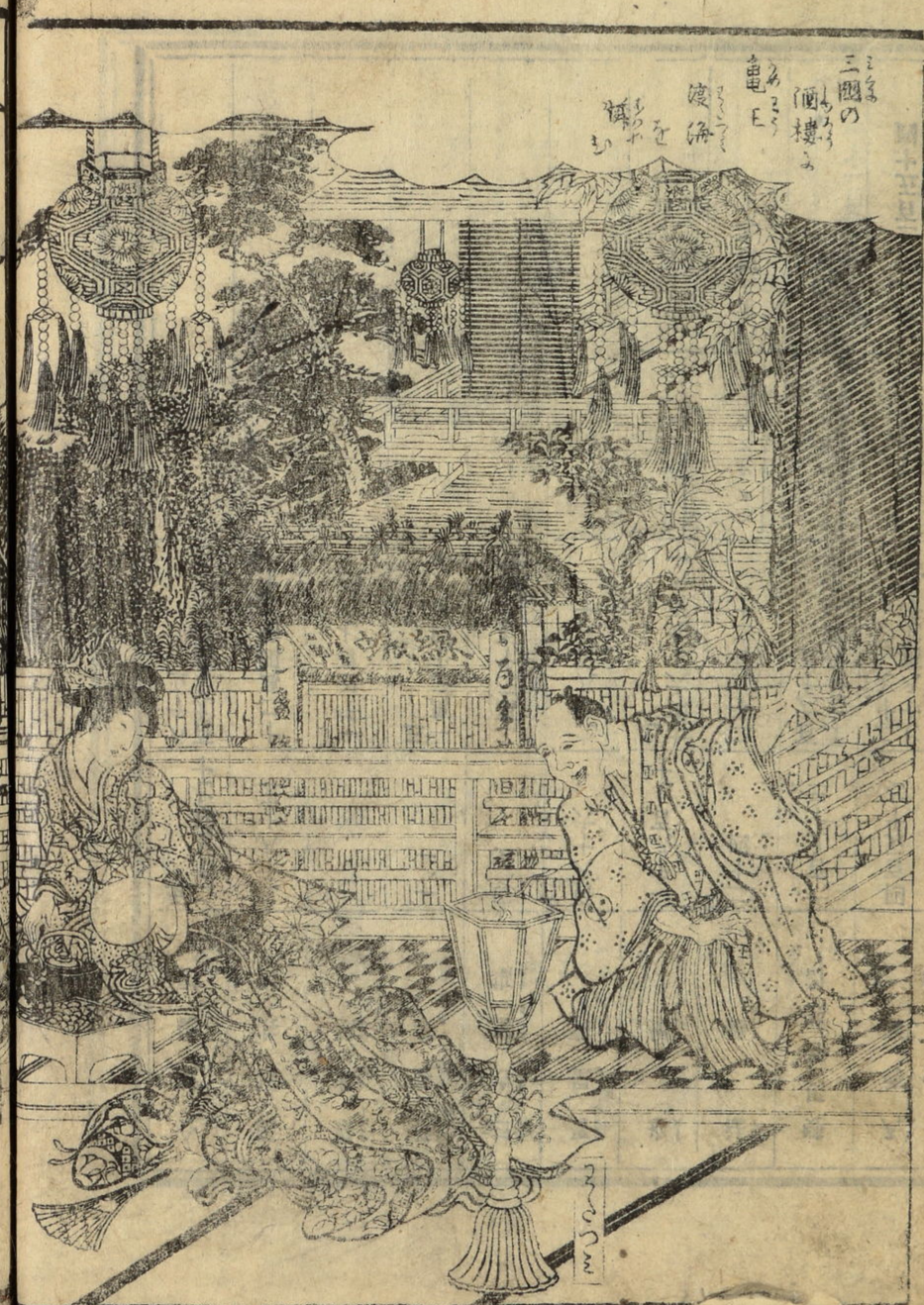
ちひろのぐ。緣故を問定めんも。紀ろの所ろのれびらうけめろうつと。愈果て
猛よ行装を整。往朝五三人の從者をおろく。京極の宿所を起初。近國の
所領を殘ろ。ろうち廻ろて。村長ホよ。領主の命を伺へつ。也ろくて戒お
ある。水仕の里よ到をね。とゐ地ハ亀王が故郷ろ多よ世ちそ性よ世を遊ろん。又
黒屋ニ京ハ。の手健ろく。氣よ。ろ。此度亀王が主の使をうけ。ろ。
ろう。豫と風声ありしろば。黒屋ハふく。松びて。五七日家よ留めさるまく。
歎ろく。年年僧級の底ろれろを伺ろく。感涙を押ろ。世よろれ母都
よ。ある蟻王がるどを。親子逃よいと。ろく。或ハ悲を。或ハ喜びぞ。物語よ。
ろとろ日數を惜めども。めとめるべ。よ。ろ。亀王ハ又よ辭ろれ。
ろ。越路ある。三國の港も法勝寺の所領ろれば。遂よ彼処よ到ろて。
後の要金を催促。百一夕。村長ホよ。携ろ巻よ。迎て酒盛よ。

ろとて二遍三遍。盃も傾ろ。豫と雀伝ろ。ろ。
紀ハ十八九ろ。ろうろ。ろ。特衣よ烏帽ろ。伊豫簾の簾ろ。出ハ。
亀王よ對ろ。恥しげよ。を低ろ。立寄ろ。
轉輾ろど。亀王ハ。ろ。村長ホハ。ろ。
ろ。回答ろ。ろ。畏難ろ。袖の雨よ。衣服ろ。ろ。
後ぐろ。ろれば。亀王忽ち。よ。ろ。ろ。ろ。
偽ろ。ろ。忌ろ。ろ。ろ。泄ホ。ろ。腹ろ。ろ。
ろ。ろ。ろ。ハ。ろ。ろ。ろ。村長ホハ。ろ。
れろ。ろ。を。勸解。彼。を。叱ろ。ハ。慌ろ。ろ。ろ。ろ。
ハ。ろ。よ。ろ。を。摺ろ。ろ。暮ろ。ろ。ろ。ろ。ろ。
ろ。ろ。ろ。ろ。ろ。ろ。ろ。ろ。ろ。ろ。ろ。ろ。

酒宴の興を添ぜんとぞ思ひ醒ましける。面白きれゆひ。こゝにいたりて
怒りを行り。嚴の水にある。黒居ねの家子。亀王丸よりくおわさぶらう。
いとゝ。なるべ御よ生云月しる。鳥浦を弟二ゞ女児渡海よ行り。父を弟二ゞ
よ水進ゝ。ゝと。筆とるとべさへ。数ゆるわゝ。ゝゝがセッハッのおろ。
厳い拾りて十のうへを。ッ二ッとりの妻のりうん。ゝろよ厳いく祝ゆく。
外主よ。ゝれと。落よ上り。絶ゝ久ゝくゆ。名告るも面ゆく侍
ゝども。傷ゝいゝゝ五年ゝ前ゝ親ゆ。ゝ煩ひて。長ゝ病着よ貯祿盡
茶の價よゝの身を換ゝ。ゆゆ。城路のゝ國ゆ。汀ゝよゝも一節ゝ
ぬ。糸行よ人を慰め。ゝよゝ。ゝゝ朗流ゝと。嬬ゝ月ゝの早秋ゝ。漢ゆく駒
の催馬樂よ。翳を扇も親骨の。爲ゝ。ゝゝ。ゝゝ。父母ゆく
ゆ行りゝ。長ゝ嘆ゝ。ゝ。積の真秋の忘貝。ゝゝ年

を経ゝのを。君いゝゝ。故郷の紙路ゝ。ゝ。ゝ。


亀王


三國の
酒樓
亀王
渡海
を
請ん

いとゞ流るゝ蝋燭の火光よ反く面影わ。雨夜の月よ海棠の花りのいと
よ異るゝ。偏よ伊勢長ホも。げよ理ハとゞろよ養と押ふ水海
も詠いえく哀まと。亀王いつゞと。緣由を伊果て数回嘆息に
原来ハ鳴浦わの息女渡海どゝ。ゆゝろ処まく。面あらちんとゝ思ひもの
別まく。忘るゝまゝわゝねど。ゆゝろ処まく。面あらちんとゝ思ひもの
ど。その人とゝもゝゝざりに。れい養とよ。よおひし。師才の契あるものを。
爭ふ間よ。あり。べれ。ハが二親世を遁めひるゝ。頃日父が物ゝう
よそりれ。ま。くとひあ。領主ハ。世よ情ある人まく在ばハ。
購く都よねとゆれ。絲の頭来ゝ伊えあげなば。松の前のほゝう遊く。
名あゝめひん。年来の憂りまるハ。ゝとれて。ゆ。穢を嫌ふ
玉帚。酒よ。ゆゝるとひ慰ゝる言葉さいと。慰ゝ。

渡海ハ深く歎び。ゆと盃を勧る母ゝよ。村長ホも。忽ち与ゝ。
おのく笑坪の會ゆゝるゝね。くて夏の夜の短く。ゝゝいく深よゝゝば。
亀王ハ旅宿よゆゝゝゝ。その夜ハ其如よ明ゝハ。ゝゝゝして渡海ハ情よ援
ま。ま。よ惑ひ。毎日よゝ樓よ登ゝく。酒ゝり抜び暮を徒よ。都へ。ゝ。
ゝち忘ま。絶よ彼女子を購ゝく。是彼の妹與よ主の要金三百両を
ゝるひぬ。亀王太郎の壮佼ことゝ。ゝゝ。ゝ。氣ハ二才ゝて。血気ゝ。
これを祇ゝ。ゝとよゝゝと。孔子のゝひゝん。ホゝ。ゝゝゝ。

第二套　抱石投淵ゝ

勇を憑ぐ　鰐田正親が事

東山鹿谷とゝ。ゝ。俊寛僧都の山荘ゝゝ。ゝの地方。後ハ三社ゝ
繞ゝ。如意山深く。前ハ洛陽遥よ直下ゝて。ゝゝ。在家を隔ゝ
密夏を相殺ゝ。究竟の閑室ゝゝ。如意ゝ嶽の後の山よ。彩よ亭

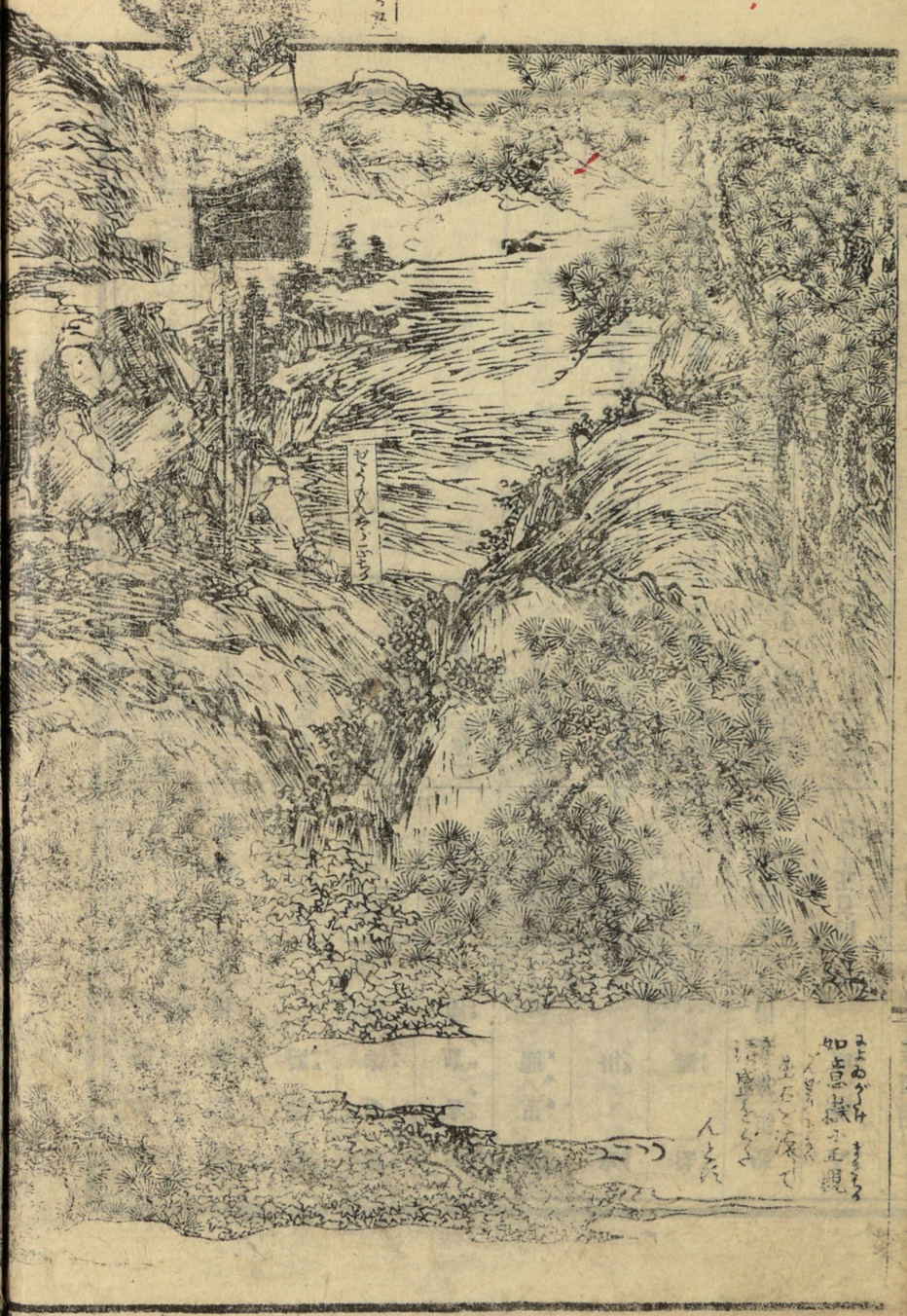
造らし。成親卿以下の徒。ようく彼処に集合く。平家を滅さんと計
畧巡めぐらしける。ようく後世その処を。鹿谷と稱ん。古蹟今の康
谷村ようい。近江のくに。一里あまりの山路と隔。岩尾山の上にあり。こゝも
ふるしへい。鹿谷と呼ぶるべし。あれ山中なれども。耳が埋に著岩も物いか
さるとりへがり人ありて。怪しみをやとく。その疑を晴ん為に。俊寛僧
都。おのが妻子のこれ居く。山莊の新宅に赴き。終日遊びらしして。暮る日も
ゆうゆう。頃は治承元年四月廿一日。僧都の山莊の若葉がくれに。鳴杜鵑
も哭ます。夫人案の前とふるの愛子。鶴の前。徳壽丸を伴ひ
有王安良子ホをゆく。ゆくべきよう。豫て蛾王に仰しべ。蛾王らけ
ふ唯彼し。を奴隷に杠擔し。主に先立て。山莊へ遣しける。時に

ゆれ。その日平相國清盛入道。如意の儺見物べくく。備前國の住人難
波二郎。經遠備中國の住人妹尾太郎。兼康ホ。豫の武士前驅後從。
如意山の鷲儺谷を投くねりゆきける。俊寛主從を嘗てまを。彼
長櫃を杠擔る奴隷ども。おのゝ比及に。岩尾山のふもと。如意の儺壺の
ほとり。彼櫃を舁おろし。儺を掬びく飲もあり。ひらたる石に
尻をかけく。草鞋の紐を結びなほすもあり。浩処に素袍の袖を
結びあげく袴の稜高くなり。六波羅様の太刀烏帽子ふる武士。
五七人走りなく。只今憩ひる。俊寛が奴隷ホを。佳とあらまく。這奴何
ものぞ礼なる。今日は平相國の儺見に出ひく。車も程遠
ゆくべかりしを。こは嗚呼之。いと漫なる。こは退どやと罵ひく。持る杖
鞭を舎なるし。排退んとなれば。奴隷ホは大に驚き怕を惑ひて。再び

長櫃を扛擔するなどぞ。右往左往する逃去りぬる。話分両頭。こゝに中ごろいぬる年治二年正月三日。長田忠宗に対面ありし。左馬頭義朝の孺君鞍ありける中に牛若丸とぞ申しける。常盤腹みく季子なり。義朝討れ給ひしころ。当才ありて在せしが。朝敵の子なれいとゞ同胞今若と若牛若とぞ。くも。おうゝ纏綿に繫ぎ給へく。既に切らるべきなれども。操に稱に慈愛に幸を命を助らるべし。母の常盤を操を破りて。操に稱に慈愛に幸を命を助らるべし。四条のほとりに山科なる老法師に学ばしめ給ひ。七歳のとき。鞍馬の別當東光坊の阿闍梨の弟子となりて。彼山に入給ひしころ。学の窓に螢雪の才を磨き。手なれ読書ならぬ。夜ゝ鞍馬の奥なる。木船の神社に参籠し。神に祈くなのごとく。武藝の奥妙を究めぬ。時に吉年十六才。天性將帥の器備りて。その志一堂を掃いぬ。祖父平家をうち滅し。天下を掃ひ清めんとぞ思ひ給ふ。近曽鞍馬を竊出て。都をば山中に立ぬ。便宜の業にあらず。それをおくく奥州へ下り。秀衡を憑て。義兵を起さんとぞ。この二三日は如意嶽よりも登り。夜は樹の蔭岩の挾間にあり。昼は終日洛中を直下して平家を一時に攻落さん。軍慮に餘念なしが。左息て宮ゝ。栄枯得失の理は人の世の常なれ。平家は天のとがをなれ。草木も靡ぬなれば。西方寺山の間より。車を轔ら。前驅後從のいかめしく冊き。鹿谷のかゝ登りあるなれば。當に見清盛なるべし。さて行き給ひ後平家の塗ぬる蟻に彷彿する。南柯の冨貴面あり。彼入道が潛幸の院の御幸に。ゆゑ揚れ給ひ。ものもに鈞の仇人に環會なり。外に車に轔さて音にはつゝ入る今。鈴のようなる紙ひとつ。弓矢神も捨られ

高峯の名さへ如意宝珠宝の山より入りゐぐゝ。よを空もるうを朽をれ。
とひとり言して伸上がれもゝ〳〵で養ふべ掃り。瞬もちべを在めべひも
おけぬ後方ろう。淮とへろど猿臂を伸〳〵て。襟をそるとと抗絅こゝ
膽ちれ女年りる。彼六波羅より毎日より出る。三百人の子頭をちゝず。
今の世より卒相國をゝさそるよりのへ忽ち視目嗅鼻が告訴して歯
を鍛舌を抜りのをゝて命ハ惜りゝぬ欲。さゝび世を拾ゝげゝれ車
のほとゝゝゝゝ賞銭ありてん。とらひもあへど。矢庭よりゝさんと
する紙牛若ゝゝ身を反りて。拂ひ退騒ぐゝる手ともゝゝえゝえ
ぬへいその人年齢い三十許りして。眼圓よ頬骨高〳〵。身丈い六尺
あゝりもあるらんとゝえゝる。洗衣の裙短ぐよ石榜の甲拙脚羊〳〵。
洗保の既巾を被り。左りよ斧を突ゝ立ゝる。鬼の荒出ゝるゝ。

ゝへあゝよゝ立ゝるが。偏ゝ目ゝゝゝゝゝゝひゝん。左右ゝゝゝゝゝゝゝゝ牛若
これを窺ゝゝ。冷咲ゝ宮ゝゝ。足引の山児ゝゝ。雛猿ゝゝゝゝゝゝ
附め。洪水が分際ゝゝ。摘ゝゝゝ九よゝゝゝど。月ゝ磐の水の月。闇ゝ平
家よ怒ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ奇怪ゝと叱ゝへべ荒男
ハ大よ怒ゝ。大番ゝ鉄拍子ゝゝ。女ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ほゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



なるべしとのたまへば。たびたび御まねをなぐめ。あいとまうすと云詞も故あるべきと
不入へきは面魂を。半分熟に清しく。世のあるべかりけるを。
引起して力をかさの儒の秋勢よ言うるは。それを半若とうりを影のかい
こと意をなげし。委細よ言れと宜へば。荒男は既ゆを脱で後ろよ居
うう頭を低くさうんせ。君のいちざまをしめさるべし。仏ちも天
左典厩義朝卿医とりよ男忠宗よ強れる。藤田二郎正清がるみよ
證人を郎正親とさうんのと。君父の仇を殺人ぞよ。情うるは身を後命。
年来この山の東なる。江刑志賀の里よ世を潜び樵夫とうりて戸は羅
ゐな洋を窺へども。後嗣なる泥性の身をそい。威勢宇宙を蓋ふ清
盛を逃るべき方仮なり。春の雲。秋の本の紫の紅も盛久に成てあるべ
どうりのがいなぐ杖をつく。杖を瞻るくいて

御曹司は鞍馬なる東光坊よ在そるうを。孫くゆ霸出てうりて大お
軍と御記傳記。義兵を起さるせとうふ。程よ。四の鞍馬よ起記。外なぐ
ら御容止を。恐ろしいとどの。雅く在んよ。夏知らるべきうれのそうい。
とうひうて立つり。只成長ありを。約もうべれば一月もの秋よ異なう
れ。孤忠を天の憐をてや。既よ二八の春過ぐ。なうりれ面新でこそ
とびうんなるこ。約びうれよ倍なる。されいるほその強弱を試ぐまうん
なるよ。物体なるとうひうるべく。恥いひうよ果しく。僕が見よ違ど。恋鳥感
そ卵の中うり。その声衆鳥よ勝ま。無檀は二条うり。その香。餘木よ
優るとうり。打物とうるは。先祖八幡感よも。芳をあらぬ天のみそうん
大将その器こそ見出て。未しなのりくいひと。只管よ稱嘆して感涙うめ
のべざりける。牛若丸は。縁由を伺て。欲びよ。退あらぬ。百年。海は正清

聞えし右郎正親とぞいふ。鞍馬山に生育て、西と東をこゝろ。暑く寒くをあぼゆる比より。平族をうち滅して父祖の孝艱に備と風夜に方寸を苦しめ。世の仰に隨て。出来人とぞいふ。欲ゐ。を以。近属の山を脱出空に秀衡に身を寄て記さん。と思へども。単身にて陸奥にわたらば。その怪忽を疑ひて義朝の子ゝ。ありけり。便宜の人をかゝらひて。俱にわたらんと。保念しつ都に近た高峯にこもり入り。ぞのよりひるれ日を送ちて。ぞ洪に環會に夏併。源家氏の右神。正八幡の加護のべ。われ人に。鑑谷のあとを投て登る。清盛が道ゆ風流のめざまし。大丈夫とるのへ雄もゝこそおぼられ。いろるれい父義朝十五个國を管領し。内の昇殿を許されて。官職武畧い祖先に勝れ。前世の業報

生ぐさうけん。ぞひ。れば平治のむし。待賢門の夜戦敗を日ゝ鉢の清盛が絳先に刺こそられ。都を落て東路に。近江を過つゝ。長田が家の浴室に。正月の雪と消ぬ。勝も負も合戦の常。あれど武士の。栄枯い槿の花ゝ。ぞほ果敢すと。ぞ。世に。卿言ゝ慷慨の涙を忍びゝ。親も小勝をもゝ直ゝ。ぞ。離のほとりへひゝ。る。清盛の車を指し。ぞ。賢ぞに。御書記君奥州へ下向ゝ。秀衡をかゝらひ。軍兵を借ん。と宣ゝ。その理あれよ。ぞ。眼前仇人を直ゝ。ぞ。儘ゝ。ぞ。這奴石を特ゝ。ぞ。殺さんとぞ易し。只正親にこそ任し。ぞ。ゝ。傷乃巌に。ぞ。ぞ。牛若志。ぞ。ぞ。ぞ

車を
虜にして
平相國
西親が
石を
頂る
清くのり車

せの尾の大将

投ずる器を忌とのいはぐや。事よ億てい懼を想を好むこそ真の勇士なるべくれ。危しく。と禁めへば正親莞爾とうち笑ひ。これ縦ていはば天の与へを取らざれい却禍を受とぞいふなる。倘ね損ぜい正親が命を捨て禦死戦ひ輙く落ちとべし義を立てなれば虜のうちなりがさぞや。と回答つ。ひとぐ。ある気色なれば。牛若再び宮ふ。忘いさるとなれど。鼎を揚山を抜項羽が膂力めらぎりせば数十丈の谷を隔て。ひらで彼を殺ん。蟷螂がおのれを車で従よ鉄車よむらぐ。車轍の鮒の泥よ吻れ。可惜命を失ぬ。めい。なれ後世でも笑はれんと仰も果ねよ正親い。右の拳を握て固て。件の巖を礎とおば。巖角岸破と砕ん。そのとれ正親を堂をうち掛ひ。商したりや。御曹司。清盛が法師首をも此ぢんとと

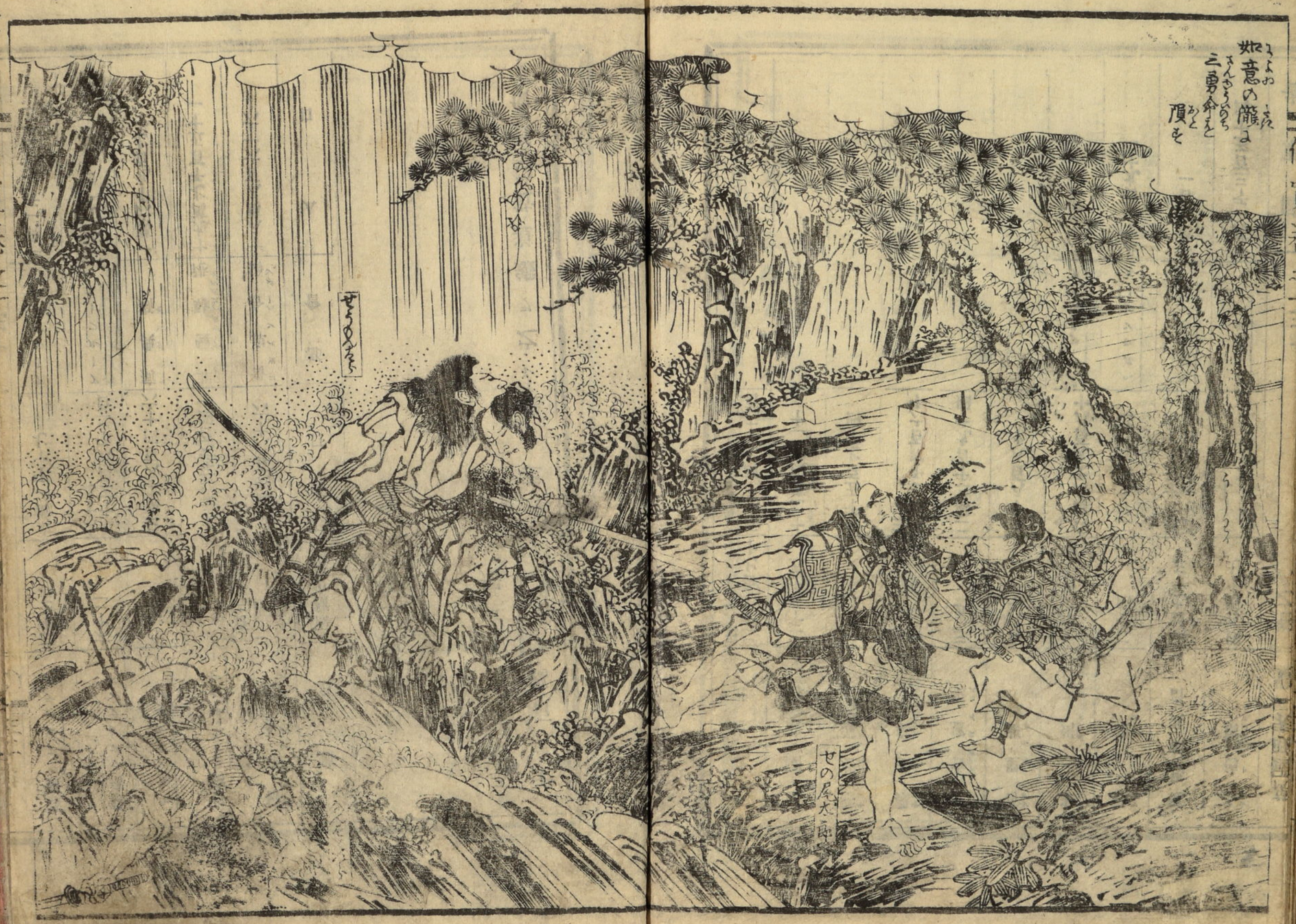
ふ。是よあり長食後よ時を後しとる。圖を外さが悔ともなげ。詳しめ。いそぐ。牛若ほと〳〵感じ。その勇力をえ〳〵ちうとく。と宣ふ。ふるぞ正親いつと身弦起して。巖をちうとりれ抱れ曳と声して。目上よさ〳〵揚て。圓い圓まるふりの巖いのうげのれどもいと重れ。小答る健男い。轉しがれ忠公。さる程よ難波妹尾が従者数百人陸続して。前よ立後よ隨ひ清盛の車。既よ如意山の裾よ寄れ。牛若られを見送して。それ今と。と宜へば。さふと正親が投ずる巖を撞と響れて牛も車も打居られ牛飼舎人い輙のやよ布れて忽息絶ぬ。とりたれども清盛い已を圓ふ。のこりりやとそ豫てその用意とある抵山よいそ身副車よ乗て。遥後方よりの打碎れとる。内のいろ日も主い在ざりる。やぼとりが難波妹尾ホ。吐嗟と猛よ驚

山の頂を倍と向上く。あれ癖者ぞ。脱さうと散動つ。まみ〳〵鉾を引接
ぎ刀戎抜挿ぢ。木の根藤蔓よとうつ。八方より攀登る。牛若
主従戎。稲麻竹葦よとり巻とり。当下正親ハ曹司よりうんぬう敵
兵山をとり巻とれば。僕らの処よ踏とどまりて。力の刀のつくしけり
陽光戎ひゆうんよ。とく落あへとすめども。牛若ぢをうち振て仮縦
万夫不当の勇ありとも。彼方勢をめけ　ちん伊こうと死とんぬとてうぐ
身必行るみもあらじ。ぢ〳〵が主従力を戦〳〵。ぢの移よ戦ひて。ろとも。
ら山の峰と消んとて。ぢ〳〵後ゆとらめと定ひて。一足も退ぬい
ど正親ぢ。これ淀ともかぐえのらじ。忠臣その君よ代をて死
つると和漢よ殆ら〳〵ぐ。正親をいとを〳〵とこ小分と言〳〵
ともその益後ゆ〳〵ぢとり〳〵落延ぬ。とつ励し

の蔕よ似る雑色如木ホ。左右より競ひて。正親ハ些とも騒ぢ
山ひを引抜て。ヨ勢が中よ割て入り。縦横ぞ早よ薙仆せ。時
間よ十人あまり血よ塗れてぞ臥ける。その隙よ牛若ハ茂林の中よ
ぢ入り。腹を切らんとあぼもーぐ。敵一騎をも殺よめどもそれ入ぬ
ぢ。ぢ〳〵が志も強ぢ。ぢれば脱ぢて死ぬ。とうひ
へと敵よ見蓄られざる戎。僥倖よ。麓のりぢ。ぢりのよ。正親ハ牛若を
後ぢ。ぢ〳〵落ぢ。ぢんとうひ〳〵ぐ。勇を奮て戦ふ。移ぢ。ぢ六人。欲ぢた
つ。ぢれが平家の後輩太勢ぢへとへぐ。ぢ勇士の降よ。欲ぢ。ぢ。ぢ。辟易て
ぢんぢる。折ぢ。難波二郎経遠。後馳よ。ぢ。ぢ。ぢ

當つ。首振彩て踏出るをあげもゝそで妹尾兼康拵をとつて走り蒐り
正親が鳩尾骨割て。背へぬきと突徹を。正親は突処を刺通て。今はかう
とおもひしが。持たる首を撲地と投著刺れるゝを柄をたゞたゝく。もえ
立て。其の社より妹尾もあらしのあれが拵を捨て正親を突倒して驀
て首をでとつてとりけり。或いふ。難波二年経遠の情無八道の帯りをて地仙よあへ雷および震
いまだ絶れり是 兼布見の折り龍壺
ゆゝて妹尾を郎兼康は正親が首級を提平相國の實
撿よ備まらんとて。後陣のうしへ走り出らんとする折しもあれ牛若丸い
正親がうのかりとあらに。迫にのりうへい落あらば。山の間を走りて。
おりがも龍谷よ。流星如。月今妹尾を兼が正朝 刺臥せ首掻とて
急ぎ逃よ。遠よ。離しく遂恨のるゝなく。家隷の 逃さじ。逢しへと
ぬび田ゆへば。兼康をとゞまりて。死を牛若い孤鳥のごく閃き

まつ。小を刀抜て妹尾を郎が。右の小髭を二三寸。刀尖ふりく砍著あり
兼康怒地落痍を負て。大よ怒を。ゆよ一言の問答もなく反て
首を棄ひ復されじとやおひん髭をにより銜て刀の鞘よまをかくる
を。拔しもゝゝど御曹司の小を刀。ふゝび閃くとえゝ。妹尾が軀い両段
とおりと。左右へ撲地と倒れ。とのゝ平家の士卒ら。辯者を駈上を
ゝく。衆皆四方よ散乱。続て蒐る敵もあれば。牛若い輙く正親が
仇を殺しとその首級さへとり復し。正親が髭よ石を結著て。龍壺の
底へ沈め。路をりとえて。脱れ去らんとぬへば。囂塵として人音近くゆえ
り。敵よ面を恐られて。後の禍を逃れよ。仇処あり泉水躰
さんとて。彼此をえらへば。右よ大なる樹の多よ。左に巨木の長
櫃あり。ゆゝやとの内よ隠るゝとも。躰果べらいかがえねど。仇人清盛小近


如意の能
三勇士
頂を
せの屋太郎

者うちそぐとも。りうのうとく。偏に命運を天に任じ。こころに八幡大菩薩
念じつゝ。慌しく櫃を開き。鎧を容べたほどの。内なる調度を引出す。
夏艸の中に投捨てをゝ跳入りて。内より蓋を舊のごとくして。音も
さらぬ〳〵ぞ。あるともたゝぬ。俊寛が奴隷どもの。先立の武士ども
追れて。ひるゝども。瀧の裏なる。怪松の下に潛居て。やゝ久しく往返
ど。還るとも。あり給ぬ。とせんかゝ。と密語あり。且く時を移
したるが。やうやく山中寂として。胆膽もやゝ定りぬれば。こゝ
ともよかるゝ。五七。長櫃のほとり。紙をとれば。鮮血流れて。簀竹の
葉を侵し。ひゝ〳〵。破れとゝ作れる。死骸を楚と。見届るに。ほゞ
ひゝと。呆れ果。さらに活る。心持ちもなければ。捨もかねぬ櫃の棹に。
動震とる肩をゝ。入れ。塞る足さへ。痛うるあり。嚴新の。ひゝ〳〵。

答の。山莊をさゝ。走去ぬ。畢竟牛若丸。山莊に解れ。
如何なる物語。次の巻に。親ちをゝ。

中山堂